

満洲語三家子方言の使役構文における 被使役者に関する考察¹

王 海波

キーワード：満洲語口語、語彙的使役、形態論的使役、被使役者

要旨

満洲語三家子方言の使役構文には、語彙的使役と形態論的使役構文は見られるが、分析的使役は見られない。語彙的使役と形態論的使役のどちらにおいても、被使役者(causee)は統語論的に常に直接目的語であり、間接目的語などになることはない。語彙的使役では、causee が主格標示をとる場合と対格標示をとる場合のどちらもあるが、形態論的使役では、causee は常に対格標示をとる。また、causee が対格標示をとることにより二重対格の現象が発生することがある。しかし、この現象は形態論的使役に限られる。

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲ツングース系の言語であり、元々清国(1616-1912)を建てた満洲族の言語である。満洲語文語(以下「文語」)とは17世紀から18世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。現在では口語としての満洲語は中国黒龍江省の数地点の20人位の満洲族と、新疆ウイグル自治区のチャブチャル(察布查爾)シベ(錫伯)自治県の約1万7千人のシベ族によって話されている(津曲1992: 203, 趙阿平&朝克2001: 2)。本稿で扱う満洲語三家子方言²(以下「三家子」)は現在黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯で話される満洲語の一方言である。

1.2. 先行研究および本稿の目的

使役構文の形式的パラメータに関しては、代表的な先行研究にShibatani(1976a: 2-3)とComrie(1981=1989: 160-161)とSong(1996: 20-67)とDixon(2000: 33-34)とShibatani & Pardeshi(2002: 103-109)などが挙げられる。

三家子の使役構文に関する先行研究には、趙杰(1989: 133)、王庆丰(2005: 55)、Kim et al.(2008: 31)などが挙げられる。これらの先行研究のいずれも、使役を表す接辞 *-bu* による使役構文のみ

¹ 本稿で扱う満洲語三家子方言のデータは筆者が2008年8月及び2009年8月に中国黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯における現地調査により得たものである。本稿を執筆するにあたり、林徹先生に貴重なアドバイスを頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

² 満洲語三家子方言では音素と単音があると想定される。/l/ [l] /w/ [w] /y/ [e] /u/ [u~o] /o/ [ɤ~ə~u] /a/ [a~ɛ] /ɔ/ [ɔ~ɛ] /p/ [pʰ] /b/ [b~b] /m/ [m] /f/ [ɸ~β] /t/ [tʰ] /d/ [ɗ~ɗ] /n/ [n] /nʰ/ [ɲ] /s/ [s~s~sʰ~s~ɕ] /ʃ/ [ʃ~ʒ] /c/ [tʃʰ] /cʰ/ [tʃʰ] /j/ [j~ɕ] /jʰ/ [tʃ~ɕ] /l/ [l~r~r] /k/ [kʰ~qʰ] /g/ [g~g~q] /ŋ/ [ŋ] /x/ [x~χ~χ~χ~ʷ] /y/ [j] /w/ [w]。

を扱っている³が、他の形式の使役構文に関する考察は見られない。また、使役構文の統語的考察に関しては、被使役者(causee)の統語的役割と格標示を扱った先行研究はほとんどない。したがって、本稿の目的は以下の2点にある。

- (i) 三家子の使役構文の全体像を見るため、各種類の形式の使役構文を考察する。
- (ii) 三家子の使役構文における causee の統語的役割と格標示を考察する。

2. 使役構文の定義と分類

2.1. 使役構文の定義

使役構文の定義に関して、Shibatani (1976a: 1-2) は次のような必要条件があると述べている。使役構文には、(a) 使役と、(b) 使役の結果、という2つの状況が含まれている。bが必ず発生し、bの発生は完全にaによる。Shibatani (1976a)は(1), (2), (3)のような英語の例文を挙げて次のような分析を行った。

- (1) I told him to go.
- (2) I know that he went.
- (3) I made him go.

(1)の場合、(1a)「私が彼に行くように言った」と(1b)「彼は行った」という2つの状況が含まれる。しかし、“I told him to go, but he actually didn’t go.” がありえるため、(1b)は必ずしも発生するとは限らない。したがって、(1)は使役構文ではないと言える。(2)の場合、(2a)「私は彼が行ったことを知っている」と(2b)は「彼は行った」という2つの状況が含まれる。しかし、(2b)の発生は(2a)によるものではないため、(2)も使役構文ではない。(3)の場合、(3a)「私が彼に行かせた」と(3b)「彼は行った」という2つの状況が含まれる。“I made him go but he actually didn’t go.” が非文となるため、(3b)が必ず発生すると言える。それに(3b)の発生は完全に(3a)による。したがって、(3)は使役構文であると言える。

本稿では、上記の状況 b を表す文の主語を被使役者(causee)と呼び、状況 b を表す文を使役構文に埋め込まれた文と呼ぶことにする。

2.2. 使役構文の分類

前述したように、使役構文の形式的パラメータによる分類に関しては、代表的な先行研究に Shibatani (1976a)と Comrie (1981=1989)と Song (1996)と Dixon (2000)と Shibatani & Pardeshi (2002)などが挙げられる。本稿では Comrie (1981=1989: 160-161)の分類法を用いることにするが、3.2.3. 節で語彙的使役と形態論的使役に関して先行研究の比較を行う。

Comrie (1981=1989: 160-161)は使役構文を次のように三分している。

³ -bu の形式に関しては、王庆丰(2005: 55)と Kim et al. (2008: 31)は -bo- という異形態もあると述べている。また、赵杰(1989: 133)は音声表記 -pu- を用いているが、本稿の音韻表記 -bu に相当すると考えられる。

[1] 分析的使役(analytical causative)では、使役を表す動詞と使役の結果を表す動詞は異なる述語を為す。

[2] 形態論的使役(morphological causative)では、使役構文の述語動詞と使役の結果を表す動詞の間には、生産的な形態論的プロセスがある。

[3] 語彙的使役(lexical causative)では、使役構文の述語動詞と使役の結果を表す動詞の間の関係は、非生産的な関係である。即ち、その間に (i) 形態論的プロセスがないか、または (ii) 非生産的な形態論的プロセスがある、という2つの可能性がある。

2.3. 三家子における主語と直接目的語の格標示

[1] 主格と対格の形式

三家子の主格の形式は特定の格標識を持たず、対格の形式は *-bə* が後続する形式である。

三家子では、母音で終わる2音節の語では、アクセントが1音節目に来る場合が多い。3音節の語の場合普通、アクセントが2音節目に来ることが多い。そのため、母音で終わる2音節の名詞は、*-bə* の付加により3音節になり、アクセントの位置が元の1音節目から2音節目に移動することがある。例えば後述する例文(5)にある *dulgo* ‘ハエ’ は *-bə* の付加により *dulgú-bə* となり、アクセントが移動する⁴。

[2] 主語と直接目的語の格標示

三家子是对格型言語であり、他動詞の主語と自動詞の主語のどちらも典型的に主格をとる。一方、他動詞文の目的語(以下 O)は対格標示をとる場合と主格標示をとる場合のどちらもある。

(i) 人称代名詞の場合、O は必ず対格をとり、主格を取ることはできない(4)。

(4) *bí sim-bə sáwə-xə* 「私はあなたを見た」
1sg 2sg-Acc see-Pfv

(ii) 人称代名詞以外の名詞句の場合、特定の(specific)ものであれば、O は対格をとることも主格をとることも可能である。例えば、例文(5)の O は「私が見た」ハエであり、特定のものである。そのため、対格をとることも主格をとることもできる。対格の場合、*-bə* の付加で名詞は3音節語となり、アクセントが2音節目に来る(*dulgú-bə*)。主格の場合、名詞は2音節語であり、アクセントが1音節目に来る(*dulgo*)。しかし、*-bə* が使用されない場合は、語幹のアクセントの位置は2音節目(*dulgú*)と1音節目(*dulgo*)の間での揺れが観察される。

(5) *bí ám dulgú-bə/dulgú/dulgo sáwə-xə* 「私は1匹のハエを見た」
1sg one fly-Acc/fly/fly see-Pfv

⁴ 名詞語幹末の *o* は、アクセントの付与により *u* に交待する。詳細は拙論王海波(2011: 84)を参照されたい。

(iii) 名詞句が総称的なものである場合、Oは対格をとることができない。例えば、例文(6)の場合、Oは総称的なハエであり、対格をとることができない。

- (6) *bí dúlgo tandá-l c'í áxo* 「私はハエを叩くのが好きではない」
1sg fly swat-Part like Neg

3. 本論

3.1. 語彙的使役

前述したように、語彙的使役では使役構文の述語動詞と使役の結果を表す動詞の語根の間に (i) 形態論的プロセスがない場合と、(ii) 非生産的な形態論的プロセスがある場合、という2つの場合がある。次にこの2つの場合における三家子の例を考察する。

3.1.1. 形態論的プロセスがない場合

次の文はこの場合に当てはまる例である。

- (7a) *ámə móm-bə tǎlə amgi toxsóń-də bəná-xə* 「父は私達をその北の村に送った」
father 1pl.Ex-Acc that north village-Dat send-Pfv
- (7b) *bó tǎlə amgi toxsóń-də yó-xo* 「私達がその北の村に行った」
1pl.Ex that north village-Dat go-Pfv
- (8a) *bí gulmáxə(-bə) wá-xə* 「私はうさぎを殺した」
1sg rabbit(-Acc) kill-Pfv
- (8b) *gulmáxə bic'i-xə* 「うさぎが死んだ」
rabbit die-Pfv
- (9a) *winggyé(-bə) ulbú-xo⁵* 「豚にえさを食べさせた」
pig(-Acc) feed-Pfv
- (9b) *winggyé dundá-bə já-kə* 「豚がえさを食べた」
pig feed-Acc eat-Pfv

上記の例文のどれにおいても、aにはbが含意される。(7)における使役構文の述語動詞 *bəná-* ‘送る’ と使役の結果を表す動詞 *yó-* ‘行く’、(8)における使役構文の述語動詞 *wá-* ‘殺す’ と使役の結果を表す動詞 *bic'i-* ‘死ぬ’、(9)における使役構文の述語動詞 *ulbu-* ‘動物にえさを食べさせる’ と使役の結果を表す動詞 *já-* ‘食べる’ は、それぞれ異なる語根であるため、非生産的な関係であると考えられる。

⁵ 後述するように三家子には使役接辞 *-bu* がある。しかし、*ul-* という形式は三家子には存在しないので、*ulbu-* を *ul-* から派生した使役動詞語幹とみなすことはできない。

上記の(7), (8)では、使役の結果を表す動詞は全て自動詞である。それに対し、(9)では、使役の結果を表す動詞は他動詞である(但し、埋め込まれた文の目的語 *dundá* は使役構文には現れない)。しかし、使役の結果を表す動詞が二重他動詞である場合の語彙的使役は見つかっていない。

本節の例文の *causee* (*bo, gulmáxa, winggye*)は、使役構文で対格標示かまたは主格標示をとり、使役構文の O である。

3. 1. 2. 非生産的な形態論のプロセスがある場合

(10a) *dəŋj'in(-bə) dá-wə-xə* 「灯りを点けた」

lamp(-Acc) be.lit-Caus-Pfv

(10b) *dəŋj'in dá-xə* 「灯りが点いた」

lamp be.lit-Pfv

上記の(10)の例では、使役構文の述語動詞 *dawə-* ‘点ける’ と使役の結果を表す動詞 *da-* ‘点く’ の間には、使役を表す要素 *-wə* が抽出できる。現在までの調査では、*-wə* という要素が使役の機能を果たす例は、上記の *dawə-* の 1 例のみである⁶。したがって、*-wə* という使役の要素の付加は非生産的であると考えられる⁷。

(11a) *bí mólo/moló/moló-bə əwúla-xə* 「私は茶碗を壊した」

1sg bowl/bowl/bowl-A break-Pfv

(11b) *mólo əwuj'i-xə* 「茶碗が壊れた」

bowl be.broken-Pfv

上記の例(11)の場合、使役構文の述語動詞 *əwúla-* ‘壊す’ と使役の結果を表す動詞 *əwuj'i-* ‘壊れる’ の間には、*-lə* と *-j'i* の交替が見られる。*-lə* と *-j'i* のどちらも独立の形態素である。例えば、*xaskələ-* ‘(鉄で)切る’ (cf. *xáskə* ‘鉄’)、*xatələ-* ‘(布の帯を)締める’ (cf. *xátə* ‘布の帯’)では、接辞 *-lə* が後続することで他動詞を派生する。*ulgunj'i-* ‘喜ぶ’ (cf. *ulgün* ‘喜び’)では、接辞 *-j'i* が後続す

⁶ 三家子の *dawə-* と *da-* が対応すると考えられる文語の形式はそれぞれ *dabu-* と *da-* であり (文語の表記は Möllendorff (1898) にならう)。文語の *dabu-* にある *-bu* は使役接辞である。三家子の *-wə* と文語の使役動詞 *-bu* と対応する例は *dawə-* 以外にもう 1 つある。文語の *tebu* ‘座らせる(座る-Caus)’ と *te-* ‘座る’ は、形式的にはそれぞれ三家子の *təwə-* ‘運ぶ’ と *ti-* ‘座る’ に対応すると考えられる。しかし、三家子では *ti-* ‘座る’ に *ti-bu* ‘座らせる(座る-Caus)’ という形式があり、*təwə-* ‘運ぶ’ は三家子では *ti-* ‘座る’ の使役形式ではない。即ち、*təwə-* ‘運ぶ’ における *-wə* は使役の機能を果たす要素ではない。

⁷ 注 6 に挙げた三家子の *dawə-*, *təwə-* と文語の *dabu-*, *tebu-* の例では、三家子と文語の間における母音間の *w* と *b* の対応関係が見られる。しかし、この対応関係はこの 2 つの例以外の場合、語根内にもみ存在し、語根と接辞の間には存在しない。例えば、(i) 語根内の場合、三家子の *owú-xə* ‘洗う-Pfv’ と *yáwə-xə* ‘歩く-Pfv’ の語根の部分はそれぞれ文語の *obo-* と *yabu-* に対応し、*w* と *b* の対応関係が見られる。(ii) 語根と接辞の間の場合、例文(12a)にある三家子の *o-bu* は文語の *o-bu* に対応するが、**o-wu* という形式にはならない。以上により、*dawə-* は、語根に接辞がつく形式より、語根に近い性質を示しており、既に独立した語根になっているという可能性もあると考える。

ることで自動詞を派生する。したがって、*əwulə-* と *əwuj'i-* の間には *-lə* と *-j'i* の交替という形態論的プロセスがある。但し、語根 *əwu-* は単独で現れる例がないため、拘束語根(bound root) であると考えられる。また、*-lə* と *-j'i* の交替が使役としての機能を果たすのは、*əwulə-* と *əwuj'i-* の1例のみであり、非生産的であると考えられる。

例文(10)と(11)の場合、*causee* は対格標示と主格標示のどちらをとることも可能である。

3. 2. 形態論的使役

3. 2. 1. 形態論的使役の例

使役接辞 *-bu* の付加により使役を表す構文には、次のような例がある。

- (12a) *sí jugún-bə netxún o-bú-xo* 「君は布団を汚くした(汚く成らせる)」
 2sg quilt-Acc dirty become-Caus-Pfv
- (12b) *jugún netxún ó-xo* 「布団が汚くなった」
 quilt dirty become-Pfv
- (13a) *bí ím-bə tələm gulmáxə-bə wa-bú-xo* 「私は、彼にそのうさぎを殺させた」
 1sg 3sg-Acc that rabbit-Acc kill-Caus-Pfv
- (13b) *í tələm gulmáxə-bə wá-xə* 「彼はそのうさぎを殺した」
 3sg that rabbit-Acc kill-Pfv
- (14a) *bí xáxəje-bə ələm mijígə-bə səwú-də bən-bú-xo*
 1sg son-Acc this letter-Acc teacher-Dat send-Caus-Pfv
 「私は息子にこの手紙を先生へ送らせた」
- (14b) *xáxəje ələm mijígə-bə səwú-də bənə-xə*
 son this letter-Acc teacher-Dat send-Caus-Pfv
 「息子はこの手紙を先生へ送った」

上記の例文のいずれにおいても、a には b が含意される。使役構文の述語動詞 *o-bu-* ‘成らせる(成る-Caus)’、*wa-bu-* ‘殺させる(殺す-Caus)’、*bən-bu-* ‘送らせる(送る-Caus)’ は、それぞれ使役の結果を表す動詞 *o-* ‘成る’、*wa-* ‘殺す’、*bənə-* ‘送る’ に使役接辞 *-bu* の付加による形式である。*bənə-* は *-bu* が後続することで、2音節目の母音 *ə* が脱落する。

また、外来語に *-bu* を付加することで使役を表す場合もある。例えば、次の例文にある *gan-* は中国語の *gan* ‘やる’ に由来すると考えられる。(15a)には(15b)が含意される。

- (15a) *tələ mím-bə wéyle gan-bú-xo* 「彼は私に仕事をさせた」
 3sg 1sg-Acc work do-Caus-Pfv
- (15b) *bí wéyle gán-lə-xə* 「私は仕事をした」
 1sg work do-Vr-Pfv

中国語からの外来語 *gan-* は三家子においては新しい語彙素である。接辞 *-bu* は新しい語彙素への付加も可能であるため、生産性が高いと考えられる。

上記の(12), (13), (14)から分かるように、形態論的使役では、埋め込まれた文の動詞が自動詞、他動詞、二重他動詞である場合は全て存在する。また、このいずれの場合においても *causee* は対格標示をとっており、使役構文では0となる。現在までの調査では、形態論的使役における *causee* は常に対格標示をとり、主格標示をとる例はない。なお、*causee* が対格標示をとることで、(13a)と(14a)には二重対格が発生する。

3.2.2. 偽りの形態論的使役

Kim et al. (2008: 31)は三家子の使役接辞 *-bu* を記述するにあたって、次の例文を挙げている(グロス筆者による)。この例では、*causee* は与格をとっている。この現象は前述した「形態論的使役構文における *causee* は常に対格を取る」という現象と異なる。

- (16) *min-də əmdə ta-bu* 「私にちょっと見せて」 (Kim et al. 2008: 31)
 1sg-Dat a.little show(=see-Caus).Imp

これに関しては、筆者は次の例文を見つけた。

- (17) *bi in-də əlám bitká-bə ta-bú-xo i tá áxo*
 1sg 3sg-Dat this book-Acc show(=see-Caus)-Part-Neg 3sg see Neg
 「私は彼にこの本を見せたが、彼は見なかった」

(17)では、*causee* は使役の結果を表す *ta-* ‘見る’ を達成していない。即ち、*ta-bu* ‘見せる(見る-Caus)’ は使役の達成を含意しない。これは2.1.で述べた使役構文の定義に反する。したがって、厳密に言えば、(16)と(17)の前半のような文は使役構文ではないと考えられる。即ち、使役接辞 *-bu* がつくことで必ず使役構文を作れるわけではない。

上記の例以外に次のような例もある。次の例文にある *causee* の *xáxəje* ‘息子’ と *i* ‘彼’ は、それぞれ使役の結果を表す動詞 *tac* ‘i-勉強’、*gəla-* ‘怖がる’ を達成していない。

- (18) *bi xáxəje-də əlám bitká-bə tac'-bú-xo i tac'i áxo*
 1sg son-Dat this character-Acc teach(study-Caus)-Pfv 3sg study Neg
 「私は息子にこの字を教えたが、彼は習わなかった(即ち勉強しようとしなかった)」
- (19) *bi ím-bə gəl-bú-xo i gəlá áxo*
 1sg 3sg-Acc frighten(fear-Caus)-Pfv 3sg fear Neg
 「私は彼を脅かしたが、彼は怖がらなかった」

したがって、(18)の前半と(19)の前半のどちらも厳密な意味での使役構文ではないと考えられる。

3.2.3. 語彙的使役と形態論的使役の比較

現在まで扱った語彙的使役と形態論的使役には次の3つの場合があると考えられる。

場合 A：使役構文の述語動詞と使役を表す述語動詞の間に、形態論のプロセスがない。

場合 B：使役構文の述語動詞と使役を表す述語動詞の間に、非生産的な形態論のプロセスがある。

場合 C：使役構文の述語動詞と使役を表す述語動詞の間に、生産的な形態論のプロセスがある。

本稿では Comrie (1981=1988)の分類法に従い、場合 A と場合 B の使役をまとめて「語彙的使役」に分類し、場合 C の使役を「形態論的使役」に分類した。しかし、この3つの場合の分類は、先行研究により様々である。それをまとめると、表1のようになる。

表1 語彙的使役と形態論的使役

	場合 A	場合 B	場合 C
使役構文の述語動詞	wa- '殺す'	awu-la- '壊す'	o-bu- '成らせる'
使役の結果を表す述語動詞	bic-i- '死ぬ'	awu-j-i- '壊れる'	o- '成る'
Causee の格標示	主格または対格		対格のみ
Shibatani (1976a)	語彙的(lexical)		生産的(productive)
Comrie (1981=1989)	語彙的(lexical)		形態論的(morphological)
Dixon (2000)	語彙的(lexical)	形態論のプロセス(morphological process)	
Shibatani & Pardeshi (2002)	純粋語彙的(pure lexical)	融合的(fusional)	膠着的(agglutinative)

Shibatani (1976a: 2-3)の生産的使役及び Comrie (1981=1989: 160-161)の形態論的使役では、使役構文の述語動詞と使役の結果を表す述語動詞の間の形態論のプロセスが必ず生産的なものでなければならない。それに対し、Dixon (2000: 33-34)の形態論のプロセスによる使役には、生産性の制限は言及されていない。そのため、場合 B の使役は、生産的か否かを重視する Shibatani (1976a)及び Comrie (1981=1989)に従えば、語彙的使役に分類されるが、形態論のプロセスが存在するか否かを重視する Dixon (2000)に従えば、形態論的プロセスによる使役に分類されると考えられる。また、Shibatani & Pardeshi (2002: 103-109)は場合 B の使役を独立の種類（融合的使役）に分類している。

三家子では、場合 A と場合 B の使役構文における causee の格標示は共に主格かまたは対格である（即ち、主格標示が許される）。それに対し、場合 C の使役構文における causee の格標示は常に対格である（即ち、主格標示が許されない）。したがって、causee の格標示においては、場合 A の使役と場合 B の使役は共通の振る舞いをしており、場合 C の使役はそれと異なる振

る舞いをしている。この現象は Shibatani (1976a) と Comrie (1981=89) の分類に一致する。

3.3. 分析的使役

三家子には、分析的使役構文にあてはまるものが見られない。

次の例文では、*biso*, *ála*, *bána* は *gisúlaxa* とそれぞれ異なる述語を成しており⁸、分析的使役構文のように見える。

- (20) *tələ mím-bə əwú-də biso gám gisúla-xə*
 3sg 1sg-Acc here-Dat stay.Imp Particle say-Pfv
 「彼は私にここに泊まれといった」
- (21) *səwə júš-bə əlém bitká-bə álə tələ júšə alá áxo*
 teacher child-Acc this character-Acc write.Imp that child write Neg
 「先生は学生にこの字を書けと言ったが、その学生は書かなかった」
- (22) *bí xáxəje-bə/-bale əlém mijigə-bə səwə-də bənə gám gisúla-xə*
 1sg son-Acc-III this letter-Acc teacher-Dat send.Imp Particle gisúla-xə
 「私は、息子に、この手紙を先生に送れと言った」

しかし、これらの例文は *causee* が使役の達成を含意しない。例えば、(21)の後半には「その学生はこの書かなかった」があり、使役を達成していない。したがって、上記の例は 2.1.にある使役文の定義には反しており、使役構文ではないと考えられる。

3.4. まとめ

以上の内容をまとめると、表 2 のようになる。

表 2 各種類の使役構文における *causee* の統語的役割と格標示

右：埋め込まれた文の種類 下：使役構文の種類	自動詞文	他動詞文	二重他動詞文
語彙的使役	O (Nom/Acc)	O (Nom/Acc)	---
形態論的使役	O (Acc)	O (Acc)	O (Acc)

上記の表から、次のことがわかる。

(i) 使役構文の種類を問わず、埋め込まれた構文の他動性を問わず、*causee* は使役構文において常に目的語(O)である。

(ii) 語彙的使役の場合、*causee* は主格をとる例と対格をとる例のどちらもある。形態論的使

⁸ 但し、(21)のように *gám gisúlaxə* が省略される場合が多い。

役の場合、causee は常に対格をとり、主格をとる例は見られない。

(iii) 形態論的使役の場合、埋め込まれた文の他動性の制限がない。語彙的使役の場合、埋め込まれた文が二重他動詞文である例は見られない。

また、causee が対格標示をとることで、形態論的使役に二重対格の現象がある。しかし、語彙的使役には二重対格の現象が見られない。

4. 結び

本稿は、満洲語三家子方言に関して次の2点を明らかにした。

(i) 語彙的使役と形態論的使役は見られるが、分析的使役は見られない。

(ii) 語彙的使役と形態論的使役のどちらにおいても、使役を受けるもの(causee)の統語論的役割が常に直接目的語である。語彙的使役の場合、causee が主格をとる場合と対格をとる場合のどちらもあるが、形態論的使役の場合、causee は常に対格をとる。また、causee が対格をとることで二重対格の現象が発生する場合があるが、この現象は形態論的使役に限られる。

略号一覧

1, 2, 3 : 1, 2, 3 人称。Abl : 奪格。Acc : 対格。Caus : 使役。Dat : 与格。Ex : 除外。Ill : 方向格。Imp : 命令。Instr : 道具格。Neg : 否定。Nr : 名詞化。O : 目的語。Particle : 不変化詞。Pfv : 完了。pl : 複数。sg : 単数。Vr : 動詞化。

参考文献

- Bauer, Laurie (1988=2003) *Introducing Linguistic Morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Comrie, Bernard (1976) The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences. pp. 261-312 of Shibatani (1976b).
- (1981=1989) *Language universals and linguistic typology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Dixon, R. M. W. (2000) A typology of causatives: form, syntax and meaning. In: Dixon, R. M. W. & Aikhenvald, A. Y. (eds.) *Changing valency: Case studies in transitivity*, pp. 31-83. Cambridge: Cambridge University Press.
- 恩和巴图 (1995) 『満語口语研究』呼和浩特: 内蒙古大学出版社
- Kim, Juwon & Ko, Dongho & Chaoke, D. O. & Han Youfeng & Piao Lianyu & Boldyrev B. V. (2008) *Materials of Spoken Manchu*. Seoul: SNU Press.
- Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu grammar with analysed texts*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Shibatani, Masayoshi (1976a) The grammar of causative constructions: a conspectus. pp. 1-40 of Shibatani (1976b).
- (1976b) (ed.) *Syntax and semantics, Vol. VI, The grammar of causative constructions*. New York:

Academic Press.

Shibatani, Masayoshi & Prashant Pardeshi (2002) The causative continuum. In: Shibatani, Masayoshi (ed.) *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, pp. 85-126. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Song, Jae Jung (1996) *Causatives and Causation*. London/New York: Longman.

津曲敏郎 (1992)「満州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典第4巻』pp. 203-205. 東京：三省堂.

王海波 (2011)「満洲語三家子方言における母音調和の存在に関する考察」『北方言語研究』1: 79-99.

王庆丰 (2005)『满语研究』北京：民族出版社.

赵阿平&朝克 (2001)『黑龙江现代满语研究』哈尔滨：黑龙江教育出版社.

赵杰 (1989)『现代满语研究』北京：民族出版社.

Remarks on the Causee in the Causative Structure of the Sanjiazi Dialect of Manchu

WANG, Haibo

oukaiha@gmail.com

Keywords: spoken Manchu, lexical causative, morphological causative, causee

In the Sanjiazi dialect of Manchu, both lexical causatives and morphological causatives are attested but analytical causatives are not. Syntactically, in both the lexical causative and morphological causative, the causee plays the role of the direct object. Concerning case marking, in the lexical causative, the causee can be either in the accusative form or in the nominative form, but in the morphological causative, the causee can only be in the accusative form. The phenomenon of the double accusatives in the same clause is only possible in the morphological causative but not in the lexical causative.

(おう・かいは 博士課程)